

日本人の目から見たホロドモール

神戸学院大学経済学部

岡部芳彦

2020 年 4 月

日本人の目から見たホロドモール

要約

1920 年代から 30 年代にかけてウクライナで飢餓状態が出現したことは日本の新聞で報じられたが、現在でも議論が続く 1930 年代前半の飢饉、いわゆるホロドモールについての報道はなかった.一方、1934 年に出版された吉村忠三の著作ではソ連の強制挑発による飢餓輸出が行われていた実態が紹介されていた.ソ連に居住していた正兼菊太が帰国後に識者との座談会で語った内容には、ウクライナで凄惨な飢饉が発生したことにくわえて、その原因や人肉食についての言及があり、正確に状況が把握されていた.また、正兼は著作の中で、ロシア南部やカザフスタンなど他のソ連の地域ではなく「ウクライナの飢饉を見る」との表題がつけられていた.そこからは、1935 年の時点で、原因や背景にくわえて、飢饉がウクライナを中心とするものであったと日本の識者に意識されていたことが分かる.

1 はじめに

近年 1930 年代前半のウクライナ飢饉,いわゆるホロドモールを描いた作品の公開が続いている. 2016 年にカナダ・イギリス合作の映画『悲痛な収穫』に続き,2019 年にはウクライナで生じていた飢饉の真実を取材しようとソ連に向かったウェールズの記者ガレス・ジョーンズを描いた『真実の値段』(ポーランド・イギリス・ウクライナ合作)が公開された.同作はイェール大学の中東欧史・ホロコースト史などで知られるティモシー・スナイダーをコンサルタントとして迎えている1.

ホロドモールをめぐる宇露間のこれまでの歴史論争や後世の歴史家の議論については、この論文の主題ではないが、簡潔にまとめておきたい。1932~1933 年のウクライナ飢饉は、飢饉を意味する「ホロド」と疫病を表す「モール」を合わせて、「ホロドモール」と現在では呼ばれている². ソ連における農業の集団化、クラーク(富農)撲滅、穀物の強制的挑発にくわえて、第一次五カ年計画を成功と宣伝するため、飢饉を認めることができなかった³. 犠牲者の数は研究者や統計によって見方が分かれるが、近年の研究ではウクライナにおいては400万人前後との見解が多い。

ウクライナで大飢饉が起こっていたことは、外国人記者らによって目撃されていた. ガ

¹ 「ウクライナの人為的大飢饉を取材した外国人記者についての映画「真実の値段」 予告編公開」UKRINFORM, 2019 年 9 月 25 日 (URL: https://www.ukrinform.jp/rubric-society/2787176-ukurainano-ren-wei-de-da-ji-ewo-qu-caishita-wai-guo-ren-ji-zhenitsuiteno-ying-hua-zhen-shino-zhi-duanyu-gao-bian-gong-kai.html 最終閲覧:3 月 20 日).

 $^{^2}$ 柳沢秀一「大飢饉『ホロドモール』 — ウクライナを「慟哭の大地」と化した「悲しみの収穫」 —」,『ウクライナを知るための 65 章』明石書店, p. 163.

³ 中井和夫「ソヴィエト時代のウクライナとバルト諸国」,伊東孝之,井内敏夫,中井和夫編『ポーランドウクライナバルト史』,山川出版,1998年,pp.318-321.

レス・ジョーンズ4にくわえて、一時行動をともにしたカナダ人記者のレア・クライマン5, 『マンチェスターガーディアン』紙のイギリス人記者であったマルコム・マゲリッジ6らに よってその惨状が伝えられていた7. また, ハルキウ(ハリコフ)で働いていたオーストリア 人の化学技術者アレクサンダー・ウィーネンベルガーによって撮影され出版された写真集 は、ウクライナ飢饉の実状を写した貴重な史料として現在でも使用されている8.

ウクライナ最高会議(国会)は 2003 年 5 月の決議と 2006 年 11 月に採択した法案 「ウクラ イナにおける 1932~1933 年のホロドモールについて | で、この飢饉を「ウクライナ人に対 するジェノサイド」と認定し,欧米や南米の 15 か国の議会が同種の決議を採択した.一方, ロシアでは 2008 年 4 月, 国家院(下院)で, 「ソ連国内の 1932~1933 年飢饉の犠牲者追 悼 | に関する決議が採択され、ソ連国内の諸民族を犠牲者とする見解が示された9.

日本のソ連やロシア史研究者の多くは、ウクライナ飢饉をロシア南部、ウラル、ボルガ、 カザフスタンなどの飢饉と合わせて「ロシア・ソ連の飢饉」と捉える傾向がある. また, 現 在のロシアの公式見解である「ウクライナ人に対するジェノサイドではない|との立場に近 い例も見られる10.

⁴ ジョーンズについては以下の評伝を参照. Ray Gamache, Gareth Jones: Eyewitness to the Holodomor, Welsh Academic Press, 2013.

^{5 1904}年ポーランド生まれ,両親はユダヤ人.クライマンについては『真実への飢餓:レア・ク レイマン物語』(原題 Hunger for Truth: The Rhea Clyman Story, Andrew Tkach 監督作品, 2018 年公開)を参照.

⁶ のちに Evening Standard および The Daily Telegraph の副編集長を経てエディンバラ大学総長 を務めた. マザー・テレサの紹介者としても知られている. 'Malcolm Muggeridge, Writer, Dies at 87', The New York Times, November 15, 1990, Page 19.

⁷ 一方, スターリンを礼賛しピューリッツァー賞を得た New York Times 紙のウォルター・デュ ランティはジョーンズなどのウクライナ飢饉に関する報道を真っ向から否定する記事を書いた. 現在では、 デユランティの報道内容の信ぴょう性は否定されており、 ピューリッツァー賞はく 奪について現在でも同賞を運営するコロンビア大学などで議論が続いている. デュランティに ついては, S. J. Taylor, Stalin's Apologist: Walter Duranty: The New York Times's Man in Moscow, Oxford University Press, USA 1990, 近年の研究では Ray Gamache, 'Breaking Eggs for a Holodomor: Walter Duranty, the New York Times, and the Denigration of Gareth Jones', Journalism history 39(4):208-218, 2014 などが詳しい.

⁸ Игорь ОСИПЧУК,«Рискуя попасть в застенки НКВД, мой прадед фотографировал жертв Голодомора» («ФАКТЫ»14 февраля 2018, https://fakty.ua/258493-riskuya-popast-v-zastenki-nkvdmoj-praded-fotografiroval-zhertv-golodomora 最終閲覧: 2020 年 3 月 20 日) 写真集については, ウィーネンベルガーの孫 Samara Pearce によって以下で公開されている. (https://samarajadea3bb.myportfolio.com/albium-3 最終閲覧: 2020 年 3 月 20 日)

⁹ 柳沢「大飢饉『ホロドモール』」, p. 166.

¹⁰ 例えば下斗米 伸夫「『空白』と『記憶』: ウクライナ飢饉と歴史認識」『国際問題』 pp. 1-3, 2009

本稿では、これらの歴史的背景や議論を意識しつつ、そのウクライナ飢饉、いわゆるホロドモールを、1930年代の日本人がどの程度、状況を把握し、どのように捉えていたかを見てみたい。本稿で用いる主な史料は1930年代に日本で刊行された出版物と、雑誌『思想国防』に掲載された座談会の記事と¹¹、それを基に出版された正兼菊太の著作『ロシヤ潜行六カ年』である¹².

次節では、まず 1930 年代の新聞や書籍などを中心に、ウクライナ飢饉が日本でどのように伝わっていたのかを見てゆきたい。

2 1930年代の日本におけるウクライナ飢饉の理解

日本の新聞で、ウクライナに飢餓状態の存在が報じられたのは国際連盟のロシア難民高等弁務官(High Commissioner for Russian Refugees)であったフリチョフ・ナンセンに関連する記事である¹³.

人肉を貪り喰う饉民の群 今では官憲も見て見ぬ振り 一飢ゑたる小露の此の頃一

【ゼネヴァ十七日ロイテル發】国際連盟の依嘱を受けて露国飢饉救済に従事する諾威(著者注:ノルウェー)のナンゼン博士が先にウクライナ地方へ派遣した一経済専門家は今回當地に到着してナンゼン博士に其の報告を提出した 此の報告に依ると小露のキエフ,カルコフ,オデッサは驚くべき悲惨な状態にあって是等の都市は何れも飢餓民を以て満たされている 饉民は鉄道停車場に雲集して居るが市の財政が空乏の為め一塊の食物にもあり附けず餓死者は日々多数に上り而も死體の上に鼠や餓民の為め半ば喰ひとられたるものもあるオデッサとポルタワ間の家を棄てて放浪の旅に上り若干の都市では既に住民の八割五分が

Всесвітня історія, 2019 が詳しい.

年など. なお, ウクライナ国内外でも様々な見解や議論がある中でジェノサイドの意味合いが強い「ホロドモール」という語を使うのは最適とは言えないが, 日本では用語自体が一般には知られていない現状を鑑みて, 敢えて表題として用いた.

^{11 『}思想国防』国防教育會, 1 巻 1 号 (10 月) ~3 号 (12 月), 1935 年, 2 巻 1 号 (1 月), 1936 年.

¹² 正兼菊太『ロシヤ潜行六カ年』国防教育會, 1936年.

¹³ ナンセンは 1922 年には、「戦争捕虜の復員、ロシア難民救済、ロシア飢饉救済、そして目下進行中の小アジアおよびトラキア地方の難民救済に対する貢献」によりノーベル平和賞が贈られ 1923 年には「難民高等弁務官(High Commissioner for Refugees)」と呼称されることとなった。羽生勇作「近代人道主義体制の萌芽と難民保護―クリミア戦争から國際聯盟まで―」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.18, 147-158, 2017 年, p. 153. また、ナンセンのウクライナにおける活動については、Архірейський Д. В, ФРІТЬОФ НАНСЕН ТА УКРАЇН、

居なくなった人肉を喰う事は最早通常の事となり官憲も人肉を喰う者の処罰を中止した程である¹⁴

また,1936年には、読売新聞には以下の記事が掲載されている.

農民暴動頻發

ウクライナ地方不穏

【オデッサ廿四日發同盟】ソヴェート新聞紙の報道によればウクライナ地方に食料不足に原因とする農民暴動諸々に頻発自体憂慮されてゐる,ポルタワでは鎮圧に向かった軍隊と農民某ととの衝突により死者廿三名傷者五十余名を出した イスユム,コノトブ地方でも同様暴動が起り軍隊が出動した,食料飢饉の原因は軍隊が農民の貯蔵食料を全部没収し彼らは食するに一物も残さない状態になったためといはれてゐる15

一方, 1931 年から 32 年にかけてのウクライナ飢饉については管見のかぎり日本の新聞には記事がまったく存在しない¹⁶. 当時の出版物にはいくつか記述がある. 例えば, 日蒙協会を前身とし内蒙古での文化工作を目的に軍部や財界の支援を受け設立された善隣協会¹⁷の調査部長であった吉村忠三が 1934 年に出版した『日露の現在及将来』の「ウクライナの飢饉」と題された章である¹⁸. ウクライナの飢饉の原因については「新経済政策の成功の後を受けて, スターリンが 1928 年一29 年度に 5 年計画を実施して, 再び農村に左傾政策を強行した結果である」としている¹⁹. 犠牲者の数は「ソウェート政府より何等の発表もなき故確実なる数を断言することは出来ないが, ウォルガ飢饉と大差なく, 1 千萬にも及ぶと云われている|とし,これも現在行われている議論での最大値に近い. くわえて, 飢餓輸出が行わ

15 『讀賣新聞』1936年8月25日朝刊.

^{14 『}讀賣新聞』1922年7月19日朝刊.

 $^{^{16}}$ 「朝日新聞記事データベース 聞蔵 II」,「読売新聞ヨミダス」,「毎日新聞記事データベース」で検索をした.検索した語句は「ウクライナ」,「小露」,「飢餓」,「飢饉」,「饉民」,「キエフ」,「オデッサ」,「ハリコフ」,「ハルコフ」.

¹⁷ 澤井充生「日本の回教工作と清真寺の管理統制――蒙疆政権下の回民社会の事例から」, 2014年, p. 71.

¹⁸ 別名吉村柳里,秋田県出身.明治 42 年正教神学校卒業,名古屋市立外国語学校教授,昭和 5 年満鉄嘱託,同 7 年名古屋高等商業学校教授,善隣協会調査部長となり,善隣高等商業学校教授を歴任.吉村忠三『ソ聯は日本に挑戦するか』日本講演通信社,1937年,p.1.

¹⁹ 吉村忠三『日露の現在及将来』日本公論社, 1934 年, p. 134. なお, 1946 年 3 月 17 日に GHQ によって 7769 冊の「宣伝的刊行物の没収」が指令されたが, それにより同書も没収, 廃棄された. 文部省社会教育局編『連合国軍総司令部から没収を命ぜられた宣伝用刊行物総目録』文部省社会教育局, 1949 年, p. 309.

れていた事実についても、データを交えて説明されている.

スターリンは、外貨蒐集のために、人道を無視して五年計画の第一年目(一九二八年一二九年)に九萬八千頓の穀物を圏外に出し、第二年目(一九二九年一三〇年)には二百二六万八千頓を輸出した。特に第二年目の輸出金額は三億九千三百萬頓留で所以は、新経済政策時代に貯蓄された剰余穀物を強制的に挑発したからである。これが為めに第三年目(一九三〇年一三一年)には剰余穀物を全部失ひ、其上旱魃によって収穫を失ひ、国内を飢餓状態に陥れたのである。この故にソウェート政府が大成功裡に第一次五年計画を終えたと宣傳しているに拘わらず、外国電報にはロシヤの大飢餓を傳へ、又ロシヤの穀物輸入の情報も傳えている。20

以上のように頻繁ではないにしても継続的にウクライナで飢餓状態が発生していることが日本の言論界でも紹介されていたのである.

3 正兼菊太の証言

1920 年代から 1930 年代にかけて断続的にウクライナで飢饉が発生している報道がある一方,実際に 1932 年前後にウクライナに行き,飢饉を目撃したと主張する者がいた.「前共産黨幹部」であった正兼菊太である.

正兼はどのような人物であったのだろうか.雑誌『思想国防』に掲載された正兼の座談会の記事を基に出版された『ロシヤ潜行六カ年』の編集後記には、正兼の経歴について以下のように記されている.

同氏は共産黨の幹部として黨の枢機に参加して居りましたが,もともと日本のために敵の機密を探る目的でありましたので,最後に浦塩の要塞に潜行して居る中で捕縛され,暫らく強制労働に服して銃殺を覚悟して居ました.然るに二人の兵士が来て出て来いと云うことであった.やがて外に一人の士官が待って居て自分を船に乗せるのであった.是はいよいよ銃殺して海に投げ込まれるのだと思ったら,意外にも日本の便船に乗り込ませた.そこで初めて自分の追放されたことを知った.²¹

この経歴については他の史料から裏付けられる. 外務省が作成した資料「蘇聯ノ対日赤化工作其他」によれば,正兼は,もともとは船員(2等機関士)であり,1929年にサカレン(サハリン)からソ連に渡った. 1934年時点で32歳,浦潮日本革命者団の一員であり,軍需工場に勤務し、ソ連共産党の所属であった. またウラジオストクにてスパイ容疑で入獄してい

5

²⁰ 吉村『日露の現在及将来』p. 136.

²¹ 正兼『ロシヤ潜行六カ年』p. 87.

一九二九年樺太「ソ」日国境ヲ徒歩ニテ入「ソ」後同志トシテ「ソ」聯側ヨリ待遇サレ各地ニ於テ赤色工作ニ従事シ居タルガ反「ソ」害悪分子ト共謀反蘇運動ニ関係シタル嫌疑及日本ノ軍事及経済探偵ノ嫌疑(各種材料ヲ浦汐領事館安木書記生ニ提供シタル件ガ「ゲ・ペ・ウ」ニ知レタルニ起因ス)ニテ「ゲペウ」ノ監視厳シキヨリ身ノ危険ヲ感ジ昨年十二月満「ソ」国境ヨリ満領へ逃走セムトセル際「ラズトリノエ」駅ニテ逮捕投獄セラレタル者,本年九月十四日海軍々法会議ニテ十年ノ強制労働刑ヲ言渡サレタリ²²

この 1934 年の公文書と 1936 年の正兼の著作の内容はほぼ一致している. 正兼が著書を記した 1936 年時点で公文書を見ることができたとは考えにくいので, その中にある経歴はほぼ正確であると考えられる. 『思想国防』の第一回には, 「鈴木正藏氏に物をきく會」となっているが偽名であり, 公文書にある正兼菊太が本名であったことが分かる²³.

その後,正兼の足跡は一度途絶えるが,再び姿を現すのは 1944 年であり,『防諜の生態』という著書を記している.著書の構成は第一章「日本民族の立場と防諜の意義」,第二章「智能戦に於ける防諜と攻撃」,第三章「防諜対策」で,各節は「スパイの目的と行動」や「敵性諸国は如何にしてスパイ要員を獲得するか」といった諜報員の活動に関する内容である.

この著作の序文は陸軍中将で当時東京市会議長の中岡弥高, 貴族院議員・男爵の井田磐楠,

東京控訴院検事の佐野茂樹らによって書かれている。この中で佐野の序には、「現地の劇務の間に筆を取られたる」とある。政治犯を摘発する思想検事の中心的存在であった塩野季彦の側近として知られている佐野は²⁴、「北京駐在」とも記しているため、現地とは中国であったことが分かる²⁵。そのため、この著作が出版された 1944 年前後に、正兼が中国在住であったと考えられる。中国の研究によれば、正兼は北京の仏教団体であった彌勒會總會の顧問を務めた特務機関員とされている²⁶。また終戦後、小野打寛陸軍少将²⁷をアメリカ軍の戦

_

²² JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02030943700 (第 28, 32 画像)「蘇聯ノ對日赤化工作其他」『共産党宣伝関係雑件』1934 年, (外務省外交史料館).

²³「ロシア生活の表裏を語る(鈴木正藏氏に物をきく會)」 『思想国防』 1935 年 11 月号, p. 211.

²⁴ 荻野富士夫『思想検事』岩波新書, 2000 年, p. 35.

²⁵ 新聞紙面にも北京駐在と記載がある.「佐野指導官転任」『讀賣新聞』1940 年 9 月 8 日朝刊 2 面.

²⁶ 陳靜「破壞, 高壓與反抗——淪陷時期北京文化界面面觀」『中國共產黨新聞網』 [http://cpc.people.com.cn/BIG5/64162/64172/85037/85041/6501218.html 取得日 2020 年 3 月 22 日]

²⁷ 哈爾賓特務機関勤務を経て 1939 年ラトビア公使館付武官, 1945 年 1 月には近衛第一師 団参謀長などを歴任. 『帝国陸軍将軍総覧』秋田書店, 1990 年, p. 475. 西原征夫『全記録

略事務局 (OSS) が尋問した記録では,正兼は小野打の指揮下の工作員で 1933 年 12 月に ソ連の統合国家政治局 (OГПУ) によって逮捕,1 年後に政治犯交換で帰国,1935 年 10 月よ り関東軍で働いたとされている²⁸.

『防諜の生態』の中では、「某国」と記されているものはすべてロシアの事例である²⁹. また『ロシア潜行六カ年』にも「日本のために敵の機密を探る目的でありました」と書かれていたため、もともとか、いずれかの時点から日本側の諜報員であった可能性が非常に高い.

座談会「正兼菊太氏に物をきく會」は大川周明が代表を務めた全亜細亜会³⁰で行われ、『思想国防』1935年11月号から連載が始まった。座談会の出席者は早稲田大学教授でエクトール・マロの『家なき子』を翻訳する一方で「我國反共運動の理論的文化的指導者」と称された五來素川³¹、イワン・ゴンチャロフの『オズローモフ』などの翻訳をしたロシア文学者であったが国際反共連盟³²からソ連の政治情勢に批判的な著作を出版していた山内封介³³、善

ハルビン特務機関:関東軍情報部の軌跡』毎日新聞社,1980年.

²⁸ Panagiotis Dimitrakis, *The Secret War for China: Espionage, Revolution and the Rise of Mao*, Bloomsbury Publishing, 2017, pp. 66-67.

²⁹ 例えば,「某国では敵側の諜報員をシュピオン(間諜),セキソウト(密偵)というのに対して,自己の間諜はソトルーゾニック(共働者),ラズウエチック(諜報員)と謂っている.」『防 諜の生態』p. 42.

^{30 1916} 年設立. 全亜細亜会編『国際間における日本の孤立』, 全亜細亜会, 1917 年参照.

³¹ 本名は五來欣造. 読売新聞主筆, 国民新聞主席論説委員. ロシアファシスト党と連携した皇化連盟の代表も務めた. JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04013004000 (第1 画像)「露西亜ファシスト党日本代表出演ノ皇化連盟主催演説会状況関係」『国民思想善導教化及団体関係雑件 第一巻』,1935 年 (外務省外交史料館). 「政治學博士五來欣造氏は我國反共運動の理論的文化的指導者である」(国民政治経済研究所編『日本反共運動の展望』国民政治経済研究所,1940年,p.118). 斬馬剣禅の別名で『東西両京の大学』の著者とも言われている. マロの『家なき子』(翻訳名『まだ見ぬ親』) は1901年より翌年まで連載された(『読売新聞』1901年3月1日朝刊1面~1902年7月13日2面,全94回).

^{32 1937} 年設立, 主な連盟員としては顧問: 平沼騏一郎, 近衛文麿, 頭山満, 田中光顕, 有馬良橘, 評議員: 石光真臣, 南郷次郎, 松岡洋右, 荒木貞夫など. 正兼との座談会出席者であった五来欣造(素川)も評議員を務めている. 「国際反共連盟設立趣意書」, 山内封介『赤軍将校陰謀事件の真相: スターリン暗黒政治の曝露』国際反共聯盟調査部, 1937 年, 附録 pp. 2-8.

³³ 山内の他の著作としては、山内封介『日本に挑戦する赤魔: ソヴエートの対日開戦準備』、愛国新聞社出版部、1938年など、前掲の『赤軍将校陰謀事件の真相: スターリン暗黒政治の曝露』は吉村の著書と同様に GHQ によって没収、廃棄を命じられている。文部省社会教育局編『連合国軍総司令部から没収を命ぜられた宣伝用刊行物総目録』p. 199. ロシア文学者としての山内については沢田和彦「日本におけるゴンチャローフの受容について: 翻訳・研究史概観」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』 13 号、1981年を参照。

隣協会調査部長の吉村忠三,文芸評論家の斉藤貢³⁴など6名であった³⁵. 座談会の内容は「ある學者がこれを読んで,従来ロシヤの内容に関して発表せられたる最も完全なる記録だと言っている」と称された³⁶.

一方,座談会録,著作の内容のみでは,正兼がウクライナを実際に訪問したかは確定できない.なぜなら具体的な日付やウクライナの都市名などは記されていないからである.また,著書に掲載された写真は,ウクライナ飢饉を撮影したものとして流布されており,本人が撮影したものではない.ただ,正兼によれば,ウクライナ飢饉に興味を持ったのは,レニングラードに来た高齢のウクライナ人と出会い,話を聞いたことが契機であった.

私が一九三二年レニングラードへ行った時、ハルコフからお婆さんがレニングラードに 度々南京袋を有ってパンを買ひに来たという事實があるのです。

「若いお兄さんよ、俺あが居るハルコフは、レニングラードのこんな状態とは違ふのだ、 本當にウクライナの話を聞かすから、お兄さんよ、聞いてやって呉れ、|

「自分のところには孫が四人ゐる. それだのにハルコフではパンを呉れない. 俺あは死んでも構はんが, 孫が可哀想さうだ. 」37

正兼の証言内容には不明瞭な点はあるものの,彼がソ連に 6 年間居住し,1935 年に日本でウクライナ飢饉に関する詳細な議論が識者の間で行われたのは事実である.そこで座談会を基にした著作の内容について見てみたい.

座談会録である『ロシヤ潜行六カ年』の構成は第一章「サヴェートの女性を語る」,第二章「ロシヤ生活の表裏を語る」,第三章「ウクライナの飢饉を見る」,第四章「異民族問題」,第五章「社会施設について」,第六章「教育問題を語る」と当時のソ連におけるジェンダー論から異民族問題までと網羅的な内容である.また冒頭に掲載された写真はすべて飢饉で痩せ細る人々や子供であり,この著作の主題がウクライナ飢饉に重点を置いていることが窺える.

第三章「ウクライナの飢饉を見る」は無題の部分、「農民は戦争を欲している」、「トラクターの話」、「極東のトラクターステーション」、「クラークも追拂はれる」の節に分かれている。この第三章と『思想国防』1935 年 12 月号に掲載された記事「ウクライナの饑饉地帶を潜行する」は同内容である。冒頭で正兼はウクライナ飢饉について以下のように述べ

36 正兼『ロシア潜行六カ年』p. 4.

³⁴ 代表作としては, 斉藤貢『転換日本の人物風景』大東書房, 1932 年.

³⁵ ほかに山口瑞穂, 中谷尋が出席.

^{37 「}ロシヤ生活の表裏を語る(鈴木正藏氏に物をきく會)」p. 215.

ている.

ウクライナの飢饉については私がウクライナに行って實状を自身で調べたのですがから申し上げますが、現地に行って見ると、實際犬も猫も鼠も生きたものは一疋も見當らないですね、みな食ひ盡されてしまひました.人間は農村にゐる者は大部分年寄りです.38

また,その発端は第一次五カ年計画達成のため,ソ連政府からの課された過大な収穫の割り当てと,食糧の欠乏による農民の都市への逃散が原因としている.

一九三二年にウクライナに割當てられた収穫率はその前年度プランより, 余程多かったのです. 何故なら「吾々は五箇年計画を四箇年で遂行しなければならない. それが爲にはより大なるプランを遂行せねばならない」

然るに一九三二年の實収穫は例年の 80 パーセントしかなかったのです. 何故 80 パーセントしかなかったかといふと, 食糧の缺乏の爲に農村から働き手が都市に逃げてしまって ある. 麥の植附けは出來たけれども獲り入れが出來なかったのです. ³⁹

1932年のウクライナ飢饉が凄惨な状態であったことは以下のように描写されている.

一九三二年にはウクライナ地方では農民が道端で餓死して居たのです.政府では餓死して居る者は「レンテヤーイ」(怠け者) だといって放っておいたのです.40

あの當時(一九三二年),人間が人間を食うという淺間しい状態にまで陥ったのです.私は實際この眼で観たんです.私の泊った隣の家の親爺が自分の息子を食ったのです.私はその骨を観たんです.

「子供に何にも食はせることも出來ない、その可哀さうな状態を見るに忍びないから殺したんだ、そしてあとの肉を食ったんだからそれは罪ではない」と言ふんです. 41

このような凄惨な状況下で、ウクライナを視察できたことについて正兼はどのように説

³⁸ 正兼菊太「ウクライナの飢饉を見る」『ロシヤ潜行六カ年』国防教育會, 1936 年, pp. 35-36.

³⁹ 正兼「ウクライナの飢饉を見る」pp. 36-37.

⁴⁰ 正兼「ウクライナの飢饉を見る」p. 39.

⁴¹ 正兼「ウクライナの飢饉を見る」p. 40.

明しているだろうか. 「旅行中, 貴方の食糧はどうなさいましたか」との問いかけへの答えは, 正兼のソ連国内で待遇を考える上で興味深い.

私は無論政府に優遇される地位にゐたのですから,何所に行ってもノルマを頂きましたし,吾々の行く食堂を見ますと,それは肉もありますし,白いパンもあります.吾々は兎に角別ですよ.吾々には実際を見せんのです.それで私は始終仲間と離れて,實際の状態を見たいといふので一人で入って行ったんです.42

最後に,正兼はウクライナ人の考えを以下のようにまとめている.

「儂らは戦争を欲して居る. 早く戦争があって呉れればいい. さうしてこの政府を何とか潰して呉れればいい. さうすれば吾々は吾々の新しい世界を拵へる. 今迄のロシヤが言ふようなコルホーズではなく, 自分一人がコルホーズを拵える. 家族を集めて自分の工場を拵える. 政府がやらなくても自分等がやるから政府はどんなんでも構はん | 43

彼等は私にはっきり言ふのです。ドイツはウクライナを食ひたがってゐる。日本はシベリアを欲しがって居るとスターリンが云ふが、実際早く食ってくれればいい、とさういう要求は、実際農民あたりが持って居るのですよ。44

正兼が,1935年の時点でナチス・ドイツがウクライナを狙っていることや,第二次世界大戦初期に見られたドイツ軍を解放者として一部のウクライナ人が迎えた背景にあった心性を理解していたことが窺える.

4 おわりに

1920 年代から 30 年代にかけてウクライナで飢餓状態が出現したことは、頻繁ではないものの日本のマスメディアで報じられたが、1930 年代前半の飢饉についての報道はなかった. 一方、1934 年の吉野忠三の著作物では強制挑発による飢餓輸出が行われていた実態が紹介されていた.

ソ連に居住していた正兼菊太がガレス・ジョーンズらのように実際にウクライナに赴いたのか確定はできない。それを確かめるにはウクライナ保安庁アーカイブの旧 KGB 史料などソ連側史料の調査を待たねばならない⁴⁵. ただ、日本側の公文書からは正兼が 1929 年か

⁴² 正兼「ウクライナの飢饉を見る」p. 41-42.

⁴³ 正兼「ウクライナの飢饉を見る」p. 41.

⁴⁴ 正兼「ウクライナの飢饉を見る」p. 42.

⁴⁵ 保坂三四郎「ウクライナの KGB アーカイブ: 公開の背景とその魅力」『ロシア史研究』第 105

ら少なくとも5年ないし6年間ソ連に滞在し、各地を巡り、結果としてソ連側からスパイの嫌疑をかけられ投獄、その後、追放されたことが分かる。また、正兼が座談会で語った内容には、ウクライナで凄惨な飢饉が発生したことにくわえて、その原因についての言及があるほか、人肉食が行われたことなどが具体的に語られており、かなり正確に状況が把握されていたことが分かる。また、飢饉下のウクライナ人の心性についてもある程度理解していた。

確実に言えることは、実際、ソ連に居住した経験のある人物が 1930 年代前半の飢饉をロシア南部やカザフスタンなど他のソ連の地域ではなく「ウクライナの飢饉を見る」との表題をつけていることである。現在まで 1930 年代前半にソ連で発生した飢饉を、ウクライナを中心とするものか、ソ連の各地で発生したものとするかの議論は、そのときどきの宇露の政治情勢から影響を受けている。また、それぞれの論者が研究対象とする国やその思想的背景がその主張に影響を与え、強いバイアスがかかっている感も否めない。本稿の分析から、1934 年から 35 年の時点で、飢饉の中心がウクライナであったと日本の識者に意識されていた事実は、現在のホロドモールに関する議論の進展に一助となると考えている。

号, 2020年.